

私の迷探偵

子供たちが幼稚園のころ、我が家と顔なじみになった国鉄(今のJR)公安官のAさんがいた。私より若かった。休日にはよく遊びに来て、子供たちの遊び相手になったり、風呂にも入れてくれた。

Aさん家族は、近くの線路沿いの借家に入っていた。Aさんは母親と同居の四人暮らしであった。Aさん夫妻には男の子がいて、二人が勤めに出た後は、ばあちゃんやが世話をしていた。ある日はあちゃんがよつと子供から目を離れた隙に、電車にはねられ死亡してしまった。ばあちゃんやんは責任を感じ、相当苦しんだ様だ。

そのしばらく後、Aさんは何の病気だったか忘れたが、国立病院に入院した。子供をなくしたことも原因かと思つが、問題はここから起きた。Aさんの奥さんは国立病院の看護婦さんだ。

病院には高等看護学院がある。高校卒業後、二年間の修業で正看護婦になれる。学費は無料で手当も出るし、入学競争率は相当高い。

Aさんは、その学生の一人M子と仲良くなった。退院後二人して、伊豆大島を旅行してきた。Aさんと生徒は奥さんの目を盗み、逢引を重ねて居たが、とうとう奥さんに感付かれてしまった。

AさんはM子の熱烈な恋文を、私の家を持ってきて隠していたが、私の妻に見つけられ、Aさんを追及しても、平気である。他人の恋路は何とやらで、お節介を焼いても始まらない。Aさんはその後、我が家に恋文を置いたまま、来なくなってしまった。

そんなある日、私が店に居たら奥さんが慌てて入って来て、「村上さん今M子とすれ違つた、Aも休みだから、二人は会うと思う、追い駆けて見て」と持っていた財布を渡された。

その後の事は私の人生においても、初めての経験であり、現在まで二度と無い推理小説まがいの話であるが、真実である。

すぐ店を飛び出した。M子の顔はうすうす分かつていた。宮城野駅に行くと、上りホームで電車を待っている。遠くから監視しながら、電車が来たので同じ客車に乗り込んだ。仙台駅で降り、遅れず離れず探偵気分で追いかけた。いつのまにか、M子とAさんは肩を並べて歩いている。

二人はタクシー乗場に向い、乗り込み発車した。私も後続のタクシーに飛び乗り、「チップを弾むから前のタクシーを追いかけて下さい」と頼んだ。運転手は、私を刑事か何かと思つたのかOKを出し、見失うことなく追尾してくれた。お金は奥さん持ちだから心配ない。財布には充分入っている。

八幡町の方に走って行く。途中から裏道に入った。少し走って停まつたから私も停めてもらい、見ていたら二人は降りて、建物の中に入って行く。運転手さんに料金とチップをはずみ、車から降りた。

入った建物に近付いて見ると、産婦人科医院である。中に入る事は出来ない。どうしたら良いか思索していると、裏口から看護婦さんが出てきた。「内緒の話だけれど、いま入ったAさんは、何しに来たのでしょうか」と聞いた。

いとも簡単に「奥さんがこの前ソウハしたので、今日は手当てに来たのですよ」と言う。これを聞いて探偵の仕事は終わり。大通りに出てタクシーを拾い店に帰った。

翌朝勤務を終え、帰ってきた奥さんに報告し、善後策を話し合った。主人を追及すれば家庭が崩壊するかもしれない。M子に別れて貰うほか無い。看護学院の教頭は、私が船員時代に世話になつた宮古、三和製作所の社長、紺野さんの実姉だつた。

奥さんにその事を話し、奥さんから学院の紺野さんに頼み、M子に別れてくれるようお願いしたらどうか、と提言した。

だが、うまく問屋が卸さなかつた。公になり、M子はあと半年で正看護婦になれるのに退学処分。その上、二年半に国が使つた費用一切を返納しなければならぬ。Aさんはそのお金を工面した様だ。

AさんはM子と別れた様だが、家出してしまった。仙台駅の職場には、真面目に通っている。調べたら西公園近くのアパートを借り一人住まいしている様だ。

そんな事があつた後、奥さんの事で大騒ぎが起きた。奥さんの職場から私に、「無断で休み連絡が取れない、村上さん判りませんか」と電話があつたので、走って行ってみた。

戸を叩いても返事が無い。窓の間から覗くと、仏壇の灯明が点きつ

ばなし。奥さんが居る様だが、返事が無い。ただ事ではない、と思い家に走って戻り。ボールを持って引き返した。

古い借家で木製のガラス窓だ。ボールでガラス戸を外し、家の中に飛び込んだ。奥さんは仏壇に頭を向け布団に寝ている。揺り動かしたら、「うー」と言っただきり、まるで夢遊病者だ。

急いで家に帰り病院に電話した。間もなくお医者さんと思われる人と看護婦さん三・四人が押し取り刀で店の前を走って行った。私もすぐ後から付いて行ったが、全員家の中に入ったのを見届け、店に帰った。

その後の様子を聞かせてくれた。睡眠薬を飲み過ぎたとの事だ。看護婦さんが、と思っただが、よく解釈し納得する事にした。

奥さんはその後店の四軒下に引越し、其処から病院に通う様になった。Aさんは坊ちゃん坊ちゃんとした、お人よしであった。私は酒一升持って、非番を聞きだし、アパートに行った。

酒を飲ませ、仲直りするよう説得したが、北海道に行くの九州に行くのと言っただけがあかない。

私もとうとう諦め「早く何処かに行け、奥さんには私がいよいよ人を世話するから」と捨て台詞を浴びせ、憤然として帰って来た。

その日の真夜中の事である。奥さんの部屋の窓ガラスをノックする人がいる。「誰ですか」と言つと「俺だ。移動証明書を貰いに来た」夫の声だ。「移動証明書は夜中では取れないから、入ったら」と言ったら素直に入って来て、そのまま仲直りしました、と奥さんが笑って話してくれた。

一件落着、私の苦勞が突った。

その後Aさんには、私は一度も会っていない。私を避けている様だ。合わせる顔が無いのだろう。

Aさん夫妻には、その後二人の子供が授かり、団地に自宅を求め辛穩に暮らして居たということである。定年後Aさんは亡くなったと、風の便りに聞いた。